新春インタビュー

“わからない”を自覚して 違いを受け入れる

映画『みんな、おしゃべり！』 脚本・監督 河合 健さん

ろう者とクルド人の交流を、異なる言語でのコミュニケーションの問題を通して描いた映画『みんな、おしゃべり！』が公開中です。脚本・監督の河合健さんに映画に込めた思いを聞きました。

映画館で映画を見る意味

いま映画は配信で家でも見ることができますよね。だから映画館で上映する意味って何だろうと考えました。観客席があって、知らない人と一緒に映画を見て、隣の人の笑い声や息をのむ空気があり、それらが伝播して、自分が受け取る情報も変わるのが映画館だなと。また僕自身がCODA（コーダ）という「ろう者の親を持つ聴者」なので、ろう者やCODAを題材にした映画を作りたいという気持ちをずっと持っていたのです。多言語で観客の受け取るものに差がある映画を作ってみよう。観客席の反応を含めて一つの映画作品にしたいと考えました。

日本手話とクルド語

日本にいると大多数が日本語だからわからないけれど、言語はツールというだけでなく、自分自身を表現するアイデンティティーの一つだと思います。

「言語の壁」をテーマに脚本を考えた時、CODAを取り巻く状況に一番近いのが外国人移住者二世でした。どちらも親が日本語を話せず、子どもも世代が日常の中で通訳のような役目を担っているんですね。日本に住んでいてコミュニティーを持つ外国人移住者二世の言語で考えたら、日本手話と一番近い状況にあるのがクルド語でした。どちらも消滅危機にある言語です。日本手話は長い間「言語ではない」と使用が禁止されてきました。一方クルド語も、トルコで使用が禁じられ、話すだけで逮捕される時代がありました。そういう歴史が重なりました。

ろう者と聴者向けの字幕

撮影現場は日本手話、クルド語、日本語と、本当にいろんな言語が飛び交いました。僕はCODAだけれど日本手話はあいさつ程度しかわからないし、クルド語はまったくわかりません。ろうドラマトゥルクやクルド表現監修の人たちがいなかったらこの映画はできませんでした。

字幕は「国内版字幕」として、ろう者と聴者双方に向けて作られています。だから字幕のないシーンもありますし、ろう者にも外国人が外国語を話している感覚を面白がってもらおうとクルド語での表記もしています。

タイトルは最初『あーだこーだ』だったんですけど、みんなにダサいと言われてボツになりました（笑）。次に『私の通訳者』という仮題をつけていたのですが、スタッフから「CODA＝通訳というイメージを押し付けることになるのは避けたい」と意見が出て、最終的に『みんな、おしゃべり！』に決まりました。

デフリンピックが25年に開催されることを知り、映画公開の年を合わせたことで、ろう者の人たちにもこの映画の情報が拾いやすくなったと思います。

わからないに向き合って

この映画には、聴者にしかわからない音だったり、クルド人にしかわからない言葉だったり、ろう者、CODAにしかわからない表現や背景があります。この“わからない”を自覚して、違いを受け入れることが重要だと思っています。いまの社会は相手を理解できなかったら拒絶するみたいな動きがありますよね。他者に向き合うことには努力や根性がいりますが、わからないから拒絶するのではなく、向き合い続けることが必要だと思うのです。

ぜひ違う立場の人と一緒に見て、見終わったら「どう思った？」と、おしゃべりしてほしいです。それこそ僕が最初に思い描いた「観客席を含めて作品にする」ということだと思います。

かわいけん　1989年生まれ。日本映画学校（現・日本映画大学）卒業。自主映画『極私的ランナウェイ』（2012）が『ぴあフィルムフェスティバル2012』、『ゆうばり国際ファンタスティック映画祭2013』に入選。『なんのちゃんの第二次世界大戦』（2020）で劇場公開デビュー。

©2025『みんな、おしゃべり！』製作委員会

あらすじ　ろう者の父と弟がいる古賀家と、その町に新しく越してきたクルド人一家が、ささいなすれ違いから対立する。通訳として繰り出されたのは古賀家で唯一の聴者である夏海と、クルド人一家で唯一日本語が話せるヒワだった。ある日、夏美の弟、駿が描いた謎の文字を発端に小さな対立は街を巻き込む大問題へ…。

◆全国順次公開◆
東京・ユーロスペース、大阪・扇町キネマ、福岡・KBCシネマほか上映中。兵庫・州本オリオン　12/27～、長野・長野ロキシー　1/9～、愛知・ナゴヤキネマ・ノイ　1/17～、京都・UPLINK京都　1/23～、島根・小野沢シネマ　1/28～、群馬・前橋シネマハウス　2/14～、埼玉・OttO　3/13～

文化情報　美術

横浜美術館リニューアルオープン記念展

「いつもとなりにいるから　日本と韓国、アートの80年」

本展は韓国の国立近代美術館との共同企画により、アートを通し2国間の歩みをたどる国際的にも初めての展覧会。50組以上の作家による約160点の作品が両国から集います。韓国の国立美術館から19点が来日、日本初公開の作品や同展のための新作が見られるのも魅力です。

展覧会は、時代の流れに沿って5章に分けて展示。1945年の終戦から1965年の日韓正常化までの20年間から始まり、日韓国交正常化（1965年）以後の活発な交流、1990年代「あたらしい世代、あたらしい関係」など、80年の日韓美術の関係史を深堀りします。

最終章「5章　ともに生きる」では、作品を通して、両国の現在地と未来を探ります。田中功起による映像作品（右上）は、在日コリアン3世のウリとスイス人のクリスチャンが対話を重ねて、異なる背景を持つ人が「いかに共に生きるか」という問いに向き合っていきます。

横浜で開催後、5月から韓国の国立現代美術館果川（クァチョン）でも開催されます。

田中功起《可傷的な歴史（ロードムービー）》2018年　ビデオ・インスタレーション　個人蔵

朴栖甫《遺伝質1‐68》1968年　国立現代美術館蔵　©PARKSEOBO FOUNDATION

◇会期：～年３月22日（日）／開館時間：10時～18時　（入館は17時30分まで／休館日：木曜日、2025年12月29日～2026年１月３日／入館料：一般　2000円他／会場：横浜美術館（横浜市西区みなとみらい3-4-1）／問合せ：045-221-0300